

森 美智子 (松井美智子) (教養学部言語文化学科)

「私は、私と私の環境である。」(ホセ・オルテガ・イ・ガセット)

略 歴

1981年 東北大学文学部 助手
 1983年 西南学院大学 講師
 1987年 東北学院大学 助教授
 1998年 同 教授
 専門は西洋美術史

私の美術との出会いは、仙台市立榴ヶ岡小学校に通った子供時代、画家のいとむ絵画教室で無心に鉛筆や絵筆を動かしてクロッキーや水彩画を描いていた頃に始まると思う。その後東京に移り住み、高校では物理学に憧れて物理部に所属したものの、能力といい適性といいそれは無謀にして不可能な道だった。もっともその高校時代にスペイン美術と出会った。捨てる神あれば拾う神ありというのだろうか。銀座京橋の南天子画廊で見たピカソの銅版画展、1970年上野の西洋美術館の「スペイン美術展」で得た圧倒的な印象は忘れ難く、いまでも折に触れて思い返す。

スペインの地を初めて訪れたのは、それから8年後のことで、フランコが没してわずか3年を経たばかりだった。ヘネラリッシモ(総統)と命名されたマドリードの心臓部を走る幹線道路(今日ではこの呼称は使われていない)を、美術館や研究所へ通う道すがら遭遇する市中の人や空気には、新時代到来の期待というより、フランコ時代の社会と市民感情の残滓だったのだろうか、苛立ちを含んだ粗放さと無気力がないまぜになった気配を感じたものである。あれからすでに30年以上の歳月を経て、スペイン、マドリードもある面では劇的な変貌を遂げてい

る。

この最初の留学のとき、プラド美術館の学芸員の一人であるロシオ・アルナエス女史の勧めでマドリード自治大学のフェルナンド・マリーアス氏の授業に出席することになった。授業は、ディエゴ・デ・サグレドというルネサンス期スペインの建築家が著した建築理論書『ローマ人の尺度』(1541年)という古文献の講読だった。ここに含まれる人体比例論が大きな影響力をもったことで知られている書物である。マリーアス氏はスペインのルネサンス建築史を専門とする若手研究者として『トレドのルネサンス建築』で博士号を取得した直後で、のちの回想によれば当時、ヘネラリッシモに面して建つマドリード国立図書館に通い、収蔵されているルネサンス期の美術理論書原本を片端から手にとって、とくに欄外の書き込みを研究していたという。そこで彼が遭遇した、ヨーロッパにおける建築のバイブルこと古代ローマの建築家ウィトルウィウスの『建築十書』(1556年、ヴェネツィア刊)に、エル・グレコ(1541-1614年)という画家の手になる書き込みを発見したのである。彼はこの書き込みすべてのトランスクリプトを1981年に刊行している。

私は留学前に提出した修士論文で、この画家のイタリア滞在期、異文化の中での新たなる芸術形成の問題を調査して論じていた。イタリアで制作されたとみられる作品群の制作時期を特定できる手掛かりの乏しいなか、私が着目したのは作品の内部に書き込まれている画家自身のスクリプト、署名スタイルの変遷を手掛かりとするという手法だった。あるとき、ふと図版を眺めていると、画家は独特の縮字法を行なって

いることに偶然気付いたのである。

最初の留学中には、この画家が実際にはスペインの美術伝統とあまりにかけ離れており、イタリアの同時代美術の一画に位置付けるべきと実感したため、むしろ同時代トレドの群小画家たちの活動実態を調査、またもっともスペイン的な心性を体現した画家と思われるスルバラン(1598-1664年)について資料を収集し、帰国後は16、17世紀スペインの芸術環境を広く知ることによって時間を費やした。その後は、異郷にあって異文化との格闘の中から自らの芸術を作り上げた画家ホセ・デ・リベラ(1588-1652年)について、またスペインにおける対抗宗教改革運動、当時のカトリック勢力が造形芸術をどのように規制しようとしたかという問題に関心を向け、いくつかのトピックから考察した。そして近年また、留学前に向き合った画家をめぐる新しい主題を研究課題としている。

ごく最近の論文の中で先のマリーアス氏は、20世紀初頭以来、長く受容されてきたこの画家をめぐる神話——宗教的熱情を造形において表現主義的に具現したスペインを代表する神秘主義者の画家というイメージ——は、もはや葬られるべきであると明確に主張し、当時のカトリック信仰と緊密に結びついた画家という芸術家像にさえも難色を示している。その論拠は、画家の書き込みが示唆する彼の教養と人格、蔵書の内容に加え、彼の世俗的な贅沢三昧の生活を支えたとみられる膨大な借金、借用書の山などである。また、従来の画家イメージの形成に寄与したこれまでの研究者たちを強く批判し、彼らの作り上げた神話には当時の政治的イデオロギーと彼ら相互の宗教的な結節点すら見い出せると指摘している。一方、この論文の冒頭で、マリーアス氏は「私は、私と私の環境である」というスペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの言葉を引き、自身はこの観念のもと自己形

成を遂げたと述べ、また自分が提示している新しいエル・グレコ像は、反動的ナショナリズムに対抗する反フランコのコンテキストの中で形成された、自身の世代の重要な関心事を反映した産物であると自覚している、と告白しているのである。氏とほぼ同世代である私にとって、これらの言葉の背後にあり内包されている真実は、じつは彼ばかりでなく、過去、現在そして未来のあらゆる分野の研究者一人ひとりに妥当するものであると信じられる。